

5
6
7
8
9
60
1
2
3
4
5
6
7
8
9
60
1
2
3
4
5
6
7
8
9
60
1
2
3
4
5
6

電子複写不可

平成元年九月

我が家の戦争記録(沖縄戦)

瀬良垣克夫

防衛研究所図書館



沖繩戦

《我が家の戦争記録》

あの日から四十数年

はじめて明かす

父の最期



終戦直後の一時期、本島の住民の殆んどが、石川、久志と田井等の周辺に集められ、羽地村は田井等市と呼ばれていた。

その頃の僕は、炎天下を、羽地大川の上流にあった田井等カンパンの揚水場の前を通って、田井等の部落へ行き、知っている人はいないかと、テントの中をのぞいたり、道端に立って、ほこりをまき上げて通るトラックやジープを眺めたりするのが日課であった。たまには源河の人達が収容されていたサガヤ（伊差川の奥）まで足をのぼす事もあった。

その様な或る日、その日も暑い日であった。兵隊達はふだんとは様子が違い、昼間から、走っている車の上でもビール等を飲んでさわいでいた。その日は、八月十五日であった。しかし、その頃の沖縄の人達にとって日本の勝敗はどうでも良かった。自分が捕虜になった日、壕から出てきた日、山から下りてきた日が、それぞれの終戦記念日なのである。そして、当時の僕は「瀬良垣」ではなかった。

あの日から四十四年、父の最後についての詳しい状況は、誰にも話した事はなかったし、誰も聞き出そうとはしなかった。あの忌まわしい出来事を想い出したくなか

ったからであろう。しかし最近、戦争体験者の高齢化に伴い戦争の記憶も薄れつつある。長い昭和も終り、平成の時代となった今、自分の娘達、多くの姪や甥達に、祖父の最後について書き残す事が、生き残ったものの、父に対する供養の一つと考え、遅まきながら、あえて拙筆を試みる次第である。

昭和十六年十二月、太平洋戦争が始まってから、四ヶ月位の間、日本軍はオーストラリアの近くまで進んでいた。しかし、十七年の六月頃から連合軍は反撃に移り、十八年になると日本軍は南方の多くの島々で敗退し、じわじわと後退していた。国内でも、いろいろと戦時色が強くなっていたが、まだ戦争は遠い国の出来事の様な感じであった。

しかし、十九年の春頃から、沖縄の近海でも、輸送船が、たびたび、アメリカ潜水艦の攻撃を受けていた様であった。日本兵の死体が、ときどき、海岸に打ち上げられ、雑貨や乾パン等も漂着した。八月には対馬丸事件もおこり、稲嶺校からも犠牲者が出た。

十九年七月にサイパン、九月にグアム島で日本軍が全滅してからは、だんだんと戦争が身近に感じられた。B29も頻繁に飛来し、円い飛行雲を描きながら高空から

の偵察を行っていた。

十九年に入ってから、北部でも陣地の構築がはじまり、稲嶺と源河の海岸に沿って、県道の上の山には、タコツボが掘られた。源河の分教場（現在の農協）に五十名位、部落の事務所（現在の又ル屋）に三十名位、うちに十名位の兵隊が駐屯して居た。それぞれ、所属部隊は違っていたが、源河山から杉材を切り出し、中南部へトラックで運んで行った。

うちに居た兵隊達は伍長が責任者で、一人で裏座に泊まり、残りの兵隊達は表の二部屋に居た。炊事は庭の露天でやっていたが、雨の日は物置の軒先でやっていた。山の仕事は重労働だったと思う。夕方には、みんな足をひきずる様に帰って来た。しかし、食事は量も少なく、タクアンと野菜を浮かべた味噌汁の毎日であった。気の毒に思った母がときどき、さつま芋をそつと渡そうとしていたが、誰も受け取らなかった。住民に迷惑をかける様に云われていたのかも知れない。

十九年の終り頃から源河に居た兵隊達は全員、中・南部へ引き上げた。戦闘の配置に着いたのだろう。

グアム島の全滅から一カ月後の十月十日は、全島に初の大空襲があった。その日は快晴で、朝の登校時間であ

ったが、ものすごい爆音が聞こえ、古宇利島の方から来た飛行機は、源河の沖で旋回して名護の方へ、くり返しくり返し飛んで行った。

空襲警報が発令されていなかったが、飛行機のあまりの異様な行動に、我々は学校に行く足を止め、分教場に居た兵隊達に、空襲ではないかと聞いたが、みんな下から見上げているだけで、あれは、日本の海軍機の演習だろうと云っていた。両翼と胴体に、はつきりと星のマークが見えていた。そうこうしているうちに、役場から伝令が来て、実戦だとわかり、お宮の森にあったサイレンが鳴り、誰かが「敵機来襲・敵機来襲」と叫んでいた。みんな家に逃げ帰り、壕に入っていた。

当時、伊差川には野砲・為又には高射砲の陣地が完成していたと思うが、高射砲による反撃は、源河からは見えなかった。その日は、羽地には被害が無かったが、名護湾では数隻の軍艦がやられ、マストだけを海面から突き出していた。死傷者も多数出た模様であった。建設中だった伊江島飛行場も爆撃を受け、作業に従事していた民間人も被害を受け、源河の人も犠牲になった。那覇の街も全焼した。

その後、比較的平穏な日々が続いたが、年が明けて二

十年に入ると正月早々、グラマンが、数機、低空で浜の沖を通過して行った。B29による偵察も多くなり、艦載機の来襲も日常化し、いよいよ上陸は必至の情勢となつて来た。三月頃からは、学校も閉鎖されていたと思う。田植も夜行っていた。

三月下旬、源河大橋を目標にした空襲があり、数発の小型爆弾を落して行ったが、橋は、直撃を免れた。しかし、その余波で浜の部落が焼けた。

そして、四月五日、源河に大空襲があり、部落の八十パーセント位が焼けた。その日は、昼の十二時頃から空襲警報が発令されて、夕方まで、全員防空壕に入っていた。各家庭にも壕はあったが、部落単位の壕もあった。田原はお宮の下に、水原の壕は屋部の家の下に大きなものが二つあった。一つは川に面した所にコの字型に、一つはミイ屋の家に面した所にヨの字型に掘ってあった。その日、我々はミイ屋の家の前の壕に入っていた。

源河は三方が山に囲まれているので、安全だと云われていたが、その考えは甘かった。グラマンは、最初は海の方から福地の方へ、次は海から水原へ、何回も波状攻撃で曳光弾を打ち込んで行った。海の方から来てヌードウルの山で急上昇するのは壕の中に居てもわかった。海

の方からの攻撃が終ると、こんどは、山の方から急降下して、くり返しくり返し機銃掃射をして行った。

特に山の方から来る時は、ガタガタガタと壕の真上で機銃を発射するので、みんな飛行機が通過するまで耳をおさえていた。空襲は何時間続いたか……。爆音が消えて、おそろおそろと壕を出てみると、一面焼け野が原で、煙がくすぶっているだけであった。戦前の源河の住宅は、母屋は、瓦葺の家が茅葺の家より、やや多かったが、畜舎や物置等は、九十パーセント位の家が茅葺きであった。そのため、焼夷弾を落とす必要はなかったかも知れない。桃原マタも焼かれたので、その日の空襲が如何に執拗であったか分かんと思う。

三月の上旬頃に、家財の大半は、ウクダマタのミカン島の中で作ってあった小屋に運んであったので、被害は少なかった。しかし、日頃、僕が可愛がっていた山羊が一頭焼け死んだ。それは、ザーネン種の角なしで、立ち上がると大人よりも大きく、搾乳用にと、大きな囲いの中に放し飼いをしていた。夕方はよく散歩に連れて行ったものである。

二日位、ウクダマタの小屋に泊まって、四月七日、米軍の戦車が仲尾次まで来て引き返したとの連絡があり、

部落は大騒ぎとなった。それを聞いて、いきり立った眞平屋のオジサンは、竹槍を持って浜の方へ向かって行ったが、みんなにたしなめられて帰って来たのを覚えている。オジサンは血気盛んな人だった。

誰かが、自転車を確認に行ったところ、仲尾次の橋の手前で引き返した轍の跡があり、近くの人に聞くと、牛の様な人間が戦車から降りて近くを歩いていったとの事。黒人兵が乗っていたらしい。

次の日から、大急ぎで山奥に避難小屋を作り、必要最小限の荷物だけを持って山に上がった。源河の大半の人は、ウワラマタと云う所に行った。そこは、ヌードウルから、山の上の平坦な道を二十分位行った所を右側に山の斜面を下りた所だった。源河川の上流で、水量も多く、杉林もあり、避難には最適の場所と思われていた。

前川方面の人達は、福地やシー山に行っていた様である。山に上がって後も、荷物の大半は、ウクダマタの小屋に残してあった。米はカメに入れて首だけ出して島の隅に埋めて、その上に枯草をかぶせてあった。そのため父は、昼間は近くの山に隠れて荷物の見張りをして、夕方、荷物の一部を持って山に上がって来た。夜は皆で山を下りて、荷物を持って暗い山道を登って来たことも何度もある。

あった。

山に上って始めのうちは危険を感じなかった。昼間は近くの山の木に登って部落や海を見に行った。いつも朝篤と二人で行ったと思う。

古宇利島の前から国頭の沖にかけて、十数隻の軍艦が停泊して居て、八重岳や伊豆味の方に向かって艦砲射撃をしていた。砲身から煙が出るのも、着弾地もはっきり見えた。或る日は、日本の特攻機が来て、猛烈な対空砲火を浴び、火をふいて、海に突っ込むのを見たこともあった。

この様な日々が続いたが、その時は、部落内の掃討が始まっていた。ウクダマタの小屋も焼かれてしまった。農道や林道で、毎日の様に避難民が殺られていた。彼らは三月頃から軍の命令で、強制的に北部に疎開させられ、サキヌパーの避難小屋にも多数来ていた。着のみ食のまま来たため、危険だと知りながら、明るいうちに食料を探していたものと思う。日本兵も林道で何人か犠牲になったようである。

部落内と林道周辺の掃討が終ると、米兵は山の中にも入って来る様になった。福地やシー山の避難小屋にも現われたとの情報が入り、ウワラマタも時間の問題だった。

我々は小屋から更に上流に行き、朝の十時頃から午後三時頃まで山の中腹に身をひそめていた。その間、僅かばかりの食料を口にするだけであった。そうして二・三日後、とうとうウワラマタにもやって来た。十二時頃、五人の米兵がうちの小屋まで来て引き返したそうである。新城屋のオバサンは、毎日、一人で小屋の番をしていたが、何を聞かれても手を振って知らない、知らないと言ったとの事。顔と手に炭を塗ってボロの着物を着ていたので気味悪かったのかも知れない。米兵は、次の日は下流に行き、二・三日後、又我々の方にも来て、その日はもっと上流まで行った。

うちの小屋は、川へ下りてから上流へ五軒目位の所だった。そこにはうちと新城屋で一軒、中の屋とチンガの家等が五軒位一緒だった。それから上流へ少し行ってから川の両側にいっぱい小屋が並んでいた。川に下りてから下流にも沢山の家があったが、下り口に近いため、うちの小屋が最も危険の様な気がした。それで、第二の小屋を作るため、父や中の屋のオジサン達が場所を探しに行き、一番安全だと思ったのがクルマタジャファーと云う所だった。そこはウワラマタの下り口の二〇〇米位手前を左に入り、右側の支流を上った所で、そこには一軒も

家がなかった。

翌日、小屋を建て、一軒は中の屋、一軒はうちと新城屋、大事な荷物は此の小屋へ運び、新城屋のオジサンとオバサンだけをウワラマタに残して、我々は此の小屋に移った。

此処で悲劇が起こるとは誰も知らなかった。小屋を作るため整地をしていた時に、土の中からお椀のかけらが出てきて、どうして、こんなものが此処にあるのかと、母が気味悪がっていた事、うちの弁当にだけ二度も金バインが卵を産みつけ、ウジが湧いていた事等、今にして思えば、何か不吉な出来事だった。「クルマタジャファー」と語感の悪い地名でもあった。

その頃は、殆んど連日の山狩りで、源河の住民も何人かが犠牲になっていた。此の場所も安全とは云えなくなり、他の人達は更に山の中にかくれる日が続いたが、父と僕は小屋の番のため残っていた。当時、僕は十四歳だった。体が小さかった。日本兵と思われる事はなかったし、逃げなければ、米兵は撃たないから安心だと、父は云っていた。

そうして、五月一日、その日も何もする事がないので、父と二人は小屋の前で竹の籠を作っていた。

米兵が山に入って来るのは、十時から午後二時頃まで、おそい日でも三時頃までと云われていたので、その日も平穏な一日が終わろうとしていた。

三時も過ぎた頃、今日も来ないだろうと籠を作りながら話していた。その時であった。パンパンと山にコダマしたのは、確かに自動小銃の威嚇射撃の音である。五〇米か一〇〇米位の距離だったと思う。

一瞬、二人は顔を見合わせた。僕は体から血の気が引くのを感じ、兵隊が来たかも知れないと云うと、父は、心配しないで落ち着く様にと云い、来たら、手を上げてから立つ様にと云った。云い終ると同時だった。ガサガサガサ、バリバリと、砂利と枯枝を踏んで来る靴音が聞こえたと同時に、三〇米位先に、三人の米兵が現われた。鉄カブトに戦闘靴、三人とも腕をまくり上げていた。

僕が間近に見た初めての外人だった。手を上げて立ち上がると三人は小走りに走って来た。先頭の一人は軽機関銃、後ろの二人は自動小銃を小脇にかかえ、我々の前まで来ると、何かをしゃべりながら、自動小銃の二人がボディチェックをはじめた。軽機の男は凶暴な感じで周囲を見ながら機関銃をかまえたままだった。僕のチェックは簡単だったが、父のチェックは念入り

スペイン語で
段として言ったと思う。

「アイ アリゲン ケ アーブレ エスパニョール」。しかし、興奮した彼等に対しては何の効果もなかった。スペイン語を知っている者は、誰もいない、とても云っている様だった。しばらく、押し問答が続いたが、凶暴な方が、いきなり腰から拳銃を抜き出し、パインと一発、写真の首に撃ち込み、写真を踏みつけた。そして、父に上流に向かって歩く様に指示した。

その時は殺害する事がすでに決まっていたのかも知れない。父が先頭で、次に凶暴な方が、軽機を肩にかけ拳銃を右手に、その後僕が、他の二人は自動小銃をかまえて後からついて来た。五人は黙々と歩いてきた。五〇米位上流に行った所で、止まれと拳銃の男が指示した。

そこは殆んど水は無く、砂と土が混った平坦な場所であった。立ち止まった時は、五人が入り乱れた形で立っていた。殺害のタイミングを見計らっていたのかも知れない。一〇秒か三〇秒か……。一人が僕に、帰れと合図をしたので、下流の方に向いた。その瞬間だった。背後でサツと人の動く気配がしたと同時に、パンパンパインと三発、父は「アー」と云う一声を残して、ドサツと土の上に倒れた。

だった。チェックが終ると同時に、一人は僕に、二人は父に、戦闘帽をかぶって襟章を付けた人はいないかと、手まねで迫って来た。僕には二―三回だったが、あとは三人で父に向かって何回も何回も襟章と戦闘帽のまねをしていたが、父は手と首を横に振っていた。

しびれをきらしたのか凶暴な方と他の一人が小屋の中に入り、家探しを始めた。一人は外に立って自動小銃をかまえていた。我々が立っていた位置から、中は見えなかったが、ヤナギ行李等を開けている様子だった。家探しをやったと云う事は今まで聞いた事がなかったので、僕はただならぬ物を感じていた。

その時、中から大きな声が出て、凶暴な方は、真新しい白いタオルを首に巻いて、一枚の写真を手にとって、いきり立って出て来た。他の一人は、カメラを首にかけていた。その写真は四ツ切り位の大きさと、軍服姿の長兄（繁春）の写真であった。そして、父の目の前にその写真を突き付け、居るではないか、近くの山から連れて来いと云う様な手まねを何回も何回もやっていた。父は無言のまま、首を横に振って、手で、遠い所に居ると云って居たが聞き入れなかった。

そして、あまりの激しい追及に危険を感じ、最後の手

その時、僕も、半ば意識を失ったのかも知れない。銃口で背中を突かれて歩き出した。一步、一步、背中に、今撃ち込まれるか、今撃ち込まれるかと考えながら歩いていた。そして、又一步。それは恐怖を通り越して夢の中を歩いている様であった。

父は、左の側頭部に拳銃を当てて撃たれた様である。三発のうち一発は、顔面に貫通して、眼鏡が飛び散り、頭を上流に向けて倒れていた。享年五十四歳であった。僕が後ろに向いたとたん、拳銃の男が、例えば、父の肩をつかんで後ろ向き（上流）にしてから撃ったと思う。今か、今かと思っているうちに、小屋の前まで来ていた。しかし、兵隊達はそのまま立ち去った。

気が働かなくなっていたので、自分は死んでいるのか、生きているのか、よく分からなかった。夢の中に居る様な気持で暫く立っていたが、すぐ、気を取りもどして、ウワラマタの人達に早く知らせようと思い、すぐ前の山を駆け上って近道をしたが、行っても行っても同じ所に帰って来たり、反対側のウバシ山の近くまで行ったりで、普通なら、一〇分から十五分位で行く所を、二時間以上も山の中を歩きまわって、ようやく、ウワラマタの小屋に着いた。

しかし、オジサン達は、すでにクルマタジャフへ行つた後で、小屋には、誰も居なかつた。そこへ、丁度ツユ姉さんと、シンちゃんと言ふ義弟が、食料を買いに来て居た。訳を話すと、ツユ姉さんが、まだ生きて居るかも知れないから、早く行ってみようと言つたので、三人は大急ぎでクルマタジャフへ向かつたが、その時は、もう、うす暗くなりかけていた。

山頂から川へ下りて少し歩いていたら、姉さんが急に立ち止まった……。と同時に、金パイが、ブーと飛び立ち、その方を見ると、かぶせてあつた木の葉の下から、二本の足が見えた。タンパラのおじさんであつた。後日聞いたところによると、その日、四時頃になつていたので、こんな遅い時間に米兵が山の中に入るとは知らず、みんな川つたいに歩いている所を、家族の目の前で、首に白いタオルを巻いて、先頭を歩いていた兵隊に撃たれたとの事であつた。

日が暮れていたの、姉さん達はそこから引き返した。姉さん達はその晩、山羊を一頭買って、頭を切り落して貰い、頭のない山羊を二人でかついで、暗い山路を大シツタイまで行つたそうである。

僕は、そこから、すぐに小屋に着いたが、あたりは暗

くなつていた。僕も近くに倒れているものと思つて、みんなで付近を探している最中だつた。その時は、すでに埋葬も終り、倒れていたその場所に、土が大きく盛り上がつていた。線香などあるはずもなく、木の小枝を立ててあるだけであつた。

その晩は、この小屋に泊まつたが、ほとんど寝つかれなかつた。早朝か、真夜中だつたか、鴉の大群が山の上でガーガー鳴いていた。

翌日、安全な時間に荷物を運んで、また、ウワラマタへ引越した。しかし、父の死を悲しんでいる余裕はなかつた。翌日から、また、昼間は山奥へ身をひそめる日が続いた。母は防空頭巾で顔をかくす様に歩いてた。悔みを云われるのが、つらかつたのかも知れない。

五月も半ばを過ぎた頃から、米兵は山に入つて来なくなつた。

日本軍の組織的抵抗は終つていた。戦車二台を伴つて、精米工場跡に野営して居た米兵は、何処かへ引き上げた。此の頃には、日本軍を頼りにする人は誰も居なかつた。本部方面から逃れてきたと思われる日本兵が、数人ずつ、山の頂上で、一人を見張りに立てて、横になつて居るのを時々見かけた。弾薬も食糧もなく、小銃を持って、山

の中をうろついていたと云うのが実態であつた。最後まで指揮系統を維持していたのは、護郷隊だけであつたのかも知れない。

そして、六月の終り頃、米軍から、最後通告があつた。一週間位の余裕期間があつたと思う。

七月四日以降に総攻撃を開始するので、全員山を下りる様にとの事であつた。それは、いつもの宣伝とは違つていた。山の中は、大さわぎになり、連絡員が、山から山、谷から谷へと走り、部落の有力者の意見をまとめた。下山反対の意見もあつた様だが、山を下りるキツカケが出来て、ホットしたのが本心だつたかも知れない。協議の結果、当時、区長をしておられた大城利一さんや、真平おじさん等、四人が代表となつて、住民を安全に下山させるために、米軍と交渉に行く事になつた。

一方、多野岳の日本軍とも連絡をとつていた様である。七月一日、四人の代表は、白旗を掲げて、ヌードウルの坂を下り、県道を通つて、田井等に向かつた。当時の感情では、まだ、米軍を完全には信用していなかつたので、猫の首に鈴を付けに行く気持であつたと思う。

交渉の結果、七月四日、十二時頃までに、全員、浜に集まる事になつた。

山を下りる前日、長兄も家「小屋」に帰つて来た。その晩、昔の写真を一枚残さず焼き捨てた。小屋の裏で、想い出の写真を一枚一枚焼いていった。

いよいよ下山の朝、持てるだけの荷物を持って山を降りた。一部は山に残した様である。焼け残つていたミイ屋の家に、荷物の一部を残して必要なものだけを持って浜に向かつた。

長兄は、護郷隊の小隊長をしていたので、捕まる事は覚悟していた。身のまわりの物と、僅かの荷物だけを持って着物を着て、草履をはいて、小ざつぱりした見だしなみをしていった。

水原から浜に行く途中で、兄が米兵から暴行を受けた。り、万一の事を心配した母は、兄の手を取るように、よりに添って歩いてた。僕と次兄(照輝)は鍋や風呂敷包みをついで、母の後について行つた。

途中には、自動小銃を肩にかけた米兵が何人か立っていたが、ジロジロと見るだけであつた。

浜に着くと、道端や焼け跡はごつた返していた。銃を肩にかけた米兵が、住民の間を、ゆっくりゆっくりと歩いて、日本兵らしい人は居ないかと、一人一人の顔をのぞいていた。長兄はすぐに見つかり、無言のまま手招き

で、ついて来る様に云われ、近くの空き地に連れて行かれた。其処にはすでに、多くの人が集められていた。

暫くして、二世がやって来て、「この中にセラカキは居るか」と云われ、連れ出された。兄はジープの後に付けたリヤカーに乗せられ、砂ぼこりの中に消えて行った。その日は、他にも数人の人が連れて行かれた様であった。集結が終ると、大きな荷物はトラックに積み込み、全員、歩いて田井等に向かった。

田井等に着くと、先に運んであった各自の荷物を受け取り、一晩はテントの中で過ごした。次兄は、その日のうちに田井等のカンパンに収容され、母と二人だけになった。夕食はおにぎりが配られた。早めに投降した人達は、普通の生活をしていたが、我々は、最後まで山に居て、損をした様な気がした。

山を下りる頃から、戦犯の追求があり、その家族も迫害を受けるかも知れないとの噂が広まり、我々は肩身の狭い思いだった。そのため、母は、その日のうちに、川上の上地さんの家を訪ねていた。

翌日、源河の人達は、サガヤへ移動する事になった。その時、上地のおじさんが我々を迎えに来てくれ、移動のドサクサの中で、三人は荷物を持って川上の家へ行った。

た。

おじさんの家は息子さんが二人とも兵隊に行き、夫婦だけだった。家は焼け残っていたが、避難の途中で捕まった人達が家に入っていて、自分達は家の裏の軒下に小さな部屋を作って住んでいた。しかし、上地さんは、我々を快く迎えてくれ、六畳位の小屋で四人が暮らす事になった。

翌日、おじさんは食糧の配給所へ行き、松田カマと松田克夫と登録してくれた。

上地さんの家には各部屋に一族、豚小屋・山羊小屋・物置等に、それぞれ、一族ずつ入っており、十家族位が一つの屋敷に住んでいた。その人達は、恩納から来る途中で捕虜になったとの事であった。

川上での生活が三ヶ月続き、十月上旬には源河の人達も、部落に帰る事が許された。しかし、住む家がないので、焼け残っていた中の屋に二ヶ月住んでいた。七家族位、一緒だったと思う。十二月上旬に次兄もカンパンから帰り、親戚の人達が屋敷の隅に掘立て小屋を建ててくれたので、八ヶ月ぶりに自分の家に帰って来た。長い長い八ヶ月であった。

年が明けて、二月には、生死不明であった長兄も収容

所から帰り、戦後の生活が始まった。

書き残す時に 想い出しば昔

ヌードウルぬ山ぬ 夜ぬ道登り

生き延びてなま(今)ぬ 命なりば

戦世ぬ哀り 語たてい難がな

これは僕の記憶をもとに、我が家の戦争記録として書いたものであるが、どうしても思い出せない部分は、両兄やツユ姉さんから聞いた。日時、その他に多少の誤りがあるかも知れないが、この小文で戦争中の生活の一部を知って戴ければ幸甚である。いずれ機を見て北部での実戦に参加した人達の、内部から見た戦争体験記でもまとめてみたいと思っている。

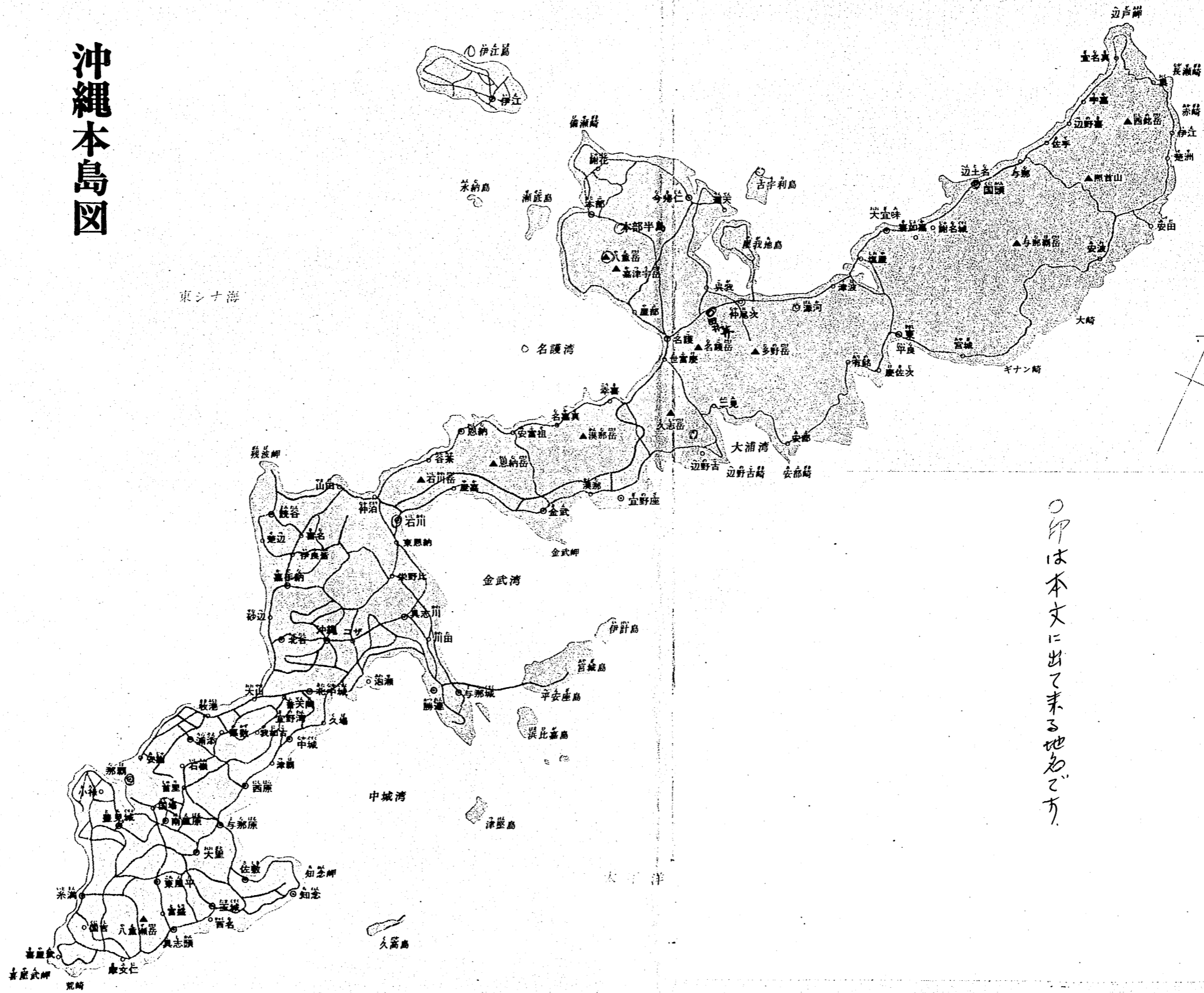
平成元年四月

羽地村源河出身

瀬 良 垣 克 夫

東京都清瀬市中清戸三三三二八
電話 ○四二四一九一―二六五〇
ファックス) 自動切換式

沖縄本島図



○印は本文に出て来る地名の方

